ピアノ入門書研究 16

佐藤峰雄

ROBERT SCHUMANN

Album fur die Jugend
Op. 68

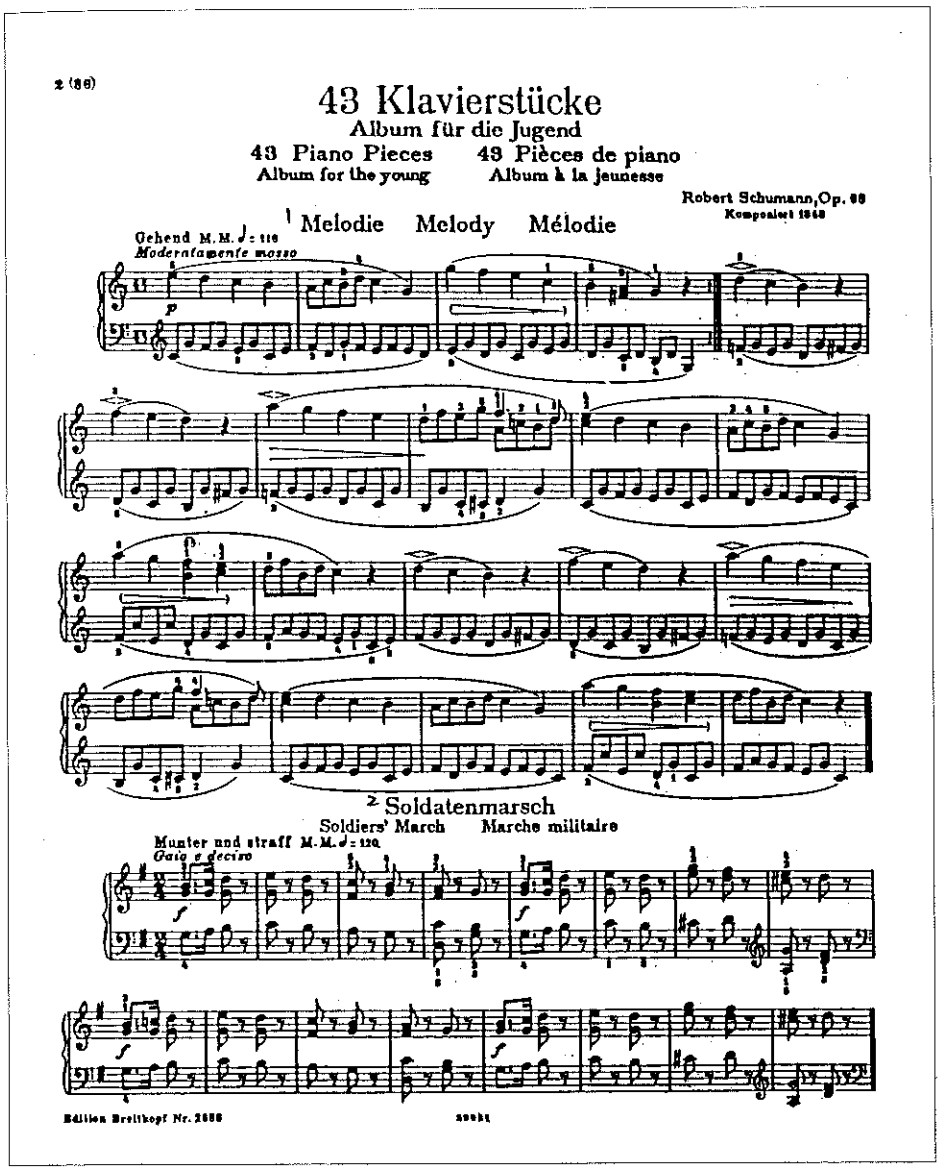
バイエルが出版された年から僅か5年後の1848年9月に，シューマンは長女マリーの誕生日に「小さなマリーの7回目の誕生日のためにパパが作ったピアノのための小品」として8つの曲を自筆で書き楽譜帳にまとめて贈りました。この時シューマンは38才であの輝かしいクラーラとの結婚の後の発病をドレスデンで克服し，オペラ・音楽劇という大作もほとんど完成して一息つける状態でした。また既に若い頃から「総ての子供の中には驚くべき深さがある」(新音楽時報1833) とか「どうしても平和に到達できそうもない大人よりも，むしろ子供を羨む方が本当ではないだろうか」(同1839) という言葉からも判るように大変こども好きだったシューマンは，これを契機に一気に多くの子供のための小品を作曲し，その年の暮れにはハンブルクの出版社から「こどものための40のピアノ小品」作品68として出版したのでした。この時の気分を「これらの曲を書いていた時ほど音楽的に自分の気持ちがのっていた時はありません・・」と10月の手紙に記しているのをみても，これらの曲集の中に純粋な愛情深さを充分に知ることが出来ますし，シューマンの音楽にみられる総てのファンタジーをも含んでいることが判ります。事実次の様に言っているのです。「〈子供の情景〉は大人が大人のために語って聴かせる回想のようなものですが，〈クリスマスのアルバム〉の方はもっと前方に向かっていて，子供にやがて訪れるであろうことの予感とか，予測といったものを含んでいるのです」(1848.10.6ライネッケへの書簡ー「こどものためのアルバム」作品68　音楽之友社 p.v 参照。なおこれらの詳細については，この音楽之友社の楽譜に見られる序文と注解をぜひ参照してください。ここには新しい資料を元にした詳しい調査の結果が報告されています。)

1850年にはこれが再販されることになりましたが，その時多少内容を変更し，初版の「40の小曲」を「43の小曲」と変え，さらに4頁の高名な付録「音楽の座右銘」が付けられました。手元にあるブライトコップフから出版されたケンプの校訂によるクラーラ版ではこの2版の様に43となっています（譜1）が，残念なことに大変重要なこの「座右銘」が省かれてしまっています。これはしかし多くの日本で出版された「ユーゲントアルバム」に見られることで，「座右銘」を持ったものは最近の音楽之友社から出されたヴィーン原典版しかないように思います。ここでは主としてこの「座右銘」を中心にシューマンを検討しようと思いますが，その前に一応「子供のためのアルバム」作品68を概観してみましょう。

音楽之友社のヴィーン原典版（以下原典版とします）では42曲となっていますが，これは38曲目の「冬」の2曲をまとめて1曲と数えてあるためで，クラーラ版ではこれが別々の2曲となっているわけです。まず目次をご覧下さい。ここで注目に値するのは，42曲が2つの部分に分けられていることです。つまり18曲目までの第1部とそれ以後の第2部で，「おさない子供たちのため」と「年上のこども達のため」となっています。これはしかし楽譜の中では全く何の表示もなく，20頁と21頁に単に18番19番と続けられているだけです。この原典版は底本として初版を用いたことは注解のⅡ.資料批判の冒頭に述べられていますので，目次の中に初版で見られた区分けをしたことは判りますが，楽譜の中でも欲しかったように思います。何れにせよ幸いこれだけ明快な区分がなされている以上，入門書としてここでは第1部を対象として検討しましょう。

「第1部　幼いこどもたちのために」1～18

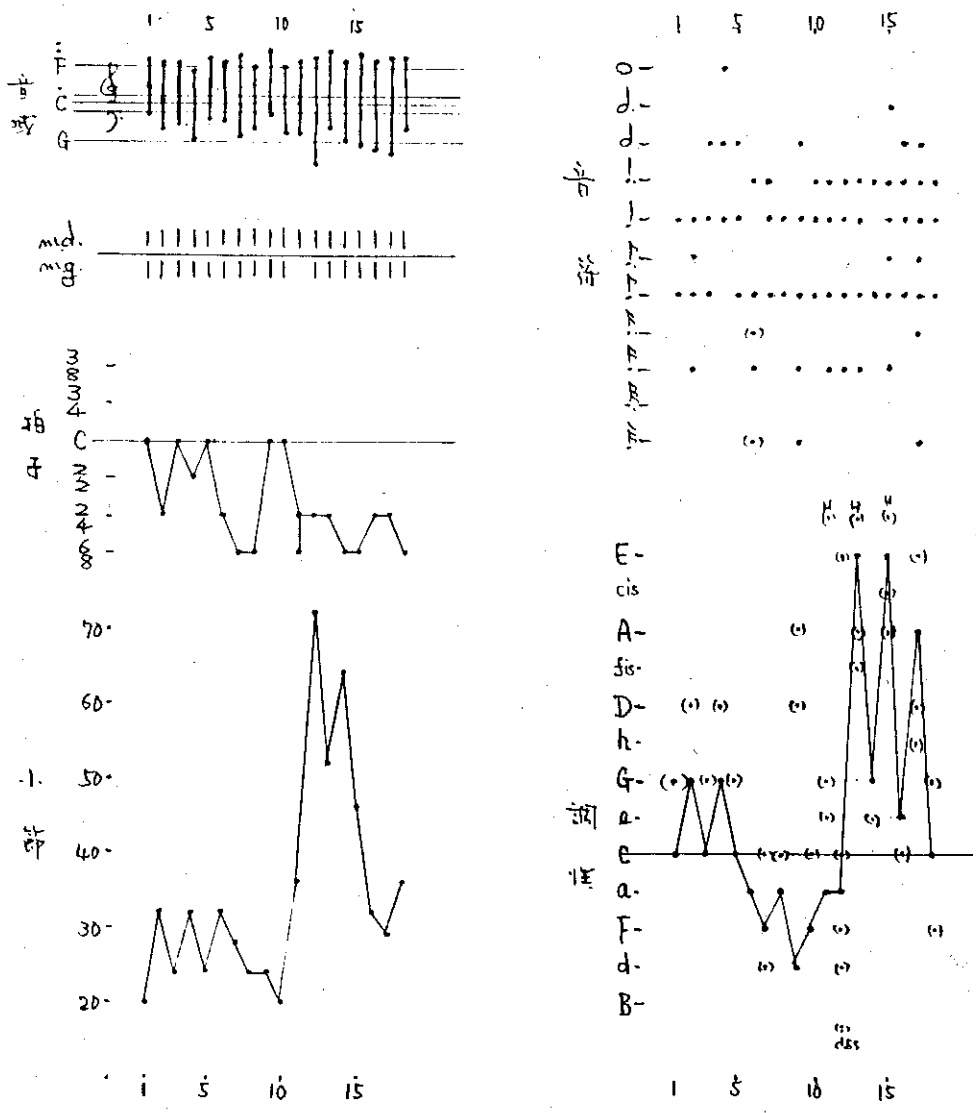
シューマンは練習曲についてもかなり詳細に調査・検



譜1

討をしており次のように述べています。「教則本とか学校の教程とかいうものは，なるほど進歩を促進さすかも知れないが，その反面，一面的かつ固陋にする・・これまでの練習曲は遺憾ながら精神的な意味で単調だ・・何も鶯鳥の真似をして一々順を追って勉強しなくても，進歩の点で一向変わりがない・・モーシェレスの性格曲は幻想力の働く余地のある面白い曲だ・・熟した金色の果物をたっぷり持っている時，何かほしがる子供に苦い木の根をやるだろうか・・フンメルの練習曲には幻想の魅力がまるでない・・チェルニーは楽器をよく知っている点で尊重に値する・・」（「音楽と音楽家」シューマン　吉田秀和訳　岩波文庫参照）。大分長い引用となってしまいましたが，これらの言葉の中からシューマンの教則本についての考え方が読み取れるのではないかと思います。これを大きく纏めてみますと1，たとえ練習曲でも性格的・精神的な詩的要素を持っていること。2，必ずしも詳細綿密に順序立てる必要はないこと。この2点に要約できるのではないでしょうか。ここにバイエルと全く同じ分類による表を作ってみましたので，比べてみて下さい（表参照）。いかにもバイエルは教師らしく

Schumann: Album für die Jugend Op.68



表

総てに事細かく順序立てていますが，シューマンでは確かに余りこだわっていないのが一目瞭然です。

・音域では2番から低音部記号を使い2オクターブ半が使われ，全体として次第にその巾は少し広げられています。ここでは大譜表から余りはみ出さない様にと言う心遣いが見られるのではないでしょうか。

・旋律線はほとんどいつも両手に見られ，バイエルの様な偏りは全くありません。これはシューマンの多声的な作曲の嗜好によることが多いわけですが，技術的にも利点があると言えます。

・拍子が2拍子だけとなっているのには驚かされましたが「唄」を考えるとそうなるのかも知れません。

・小節数が最初からかなり多いのは反復による技術的な習得を求めたとも言えるのですが，それ以上に構造から来るまとまりを重視した結果と思われます。8小節の曲も最初は作っているのですが，出版の際に省いています（原典版序参照）。

・調性を見ると，確かにハ長調から始まりますが既に部分的な転調があり，5番まではそれぞれ属調に転調していますし，それ以降になると益々その度を増し後半では3～4の調にまで変化するのが特徴的で，ここに詩的想念の横溢を見る思いがします。

・音符の使い方もバイエルとは対称的で全音符を使った曲はコラール1曲だけとなっています。子供達の歌では確かに全音符や2分音符はあまり聞いたことがなく，ここで見られるような4分音符・8分音符の場合が多いのではないでしょうか。その意味でも極めて妥当な音符の使い方といえましょう。

全体の構成を概観すると概ね以上のようなことが指摘されると思いますが，これは前に述べたシューマンの練習曲に対するかなりはっきりした意見と全く重なることになります。バイエルとシューマン，つまり教師と音楽家の違いと見られますが，これほどはっきりした考え方の相違には驚かされます。

原典版の扉の前に，最も有名な「楽しき農夫」(仕事から帰る楽しげな農夫）の自筆譜がみられます。このように総ての曲に題名がつけられているのも，これによって曲の内容が限定されてはならない（原典版序）とは言うものの，子供にとっては何らかの想像を巡らす手掛かりともなり得ましょう。これを決めるのにシューマン自身様々考えた結果であればなおのことと言えます。この表題はクープランの多くの組曲の表題と同じ意味を持っていると認識しておく心要があると思います。またそれぞれ曲の最初には自国語で発想や速度を表記していますが，これも子供たちにとって大変判りやすく楽譜を身近に感じることともなりましょう。日本の子供たちの為の楽譜ではわざわざ外国語で書かれたものが今でも沢山見られるのですが，シューマンにならって戴きたい気がします。

具体的な個々の曲については直接演奏してみることが何よりですが，1～5で拍についての認識が確立するのではないでしょうか。これだけ明快な旋律を示されると自然に歌いたくなってしまうでしょうし，そこで同時に全体のダイナミクスやアゴーギクも習得することになります。6～11では様々なリズムと共にアコードグリフが大きな課題となりますし，各種のタッチも同時に学んでしまうでしょう。12・13は明快ですばやい指の動きと柔軟な指による多声部の扱いが問われます。14番は高名なペダルの練習曲といえますし，15～18は極めて高度で繊細な感覚が要求されます。様々な人が「春の歌」を作っていますがこの15番は特にすばらしく，わずか2頁ながらどのような演奏会で弾いても他を圧して見事なピアノ曲の様に感じます。残念な事に原典版では17番の最後の段で大譜表の上の音部記号がヘ音記号となっています。これは明らかにト音記号であり，多分印刷の際の間違いと思われます。ともかく子供に「最高の音楽」を与えたのはバッハでした。ここでシューマンはまさにバッハにならったのでした。この時代になぜそうしたのでしょうか。次回にもう少しシューマンの意見を聞きましょう。